

僕は神様にも逢ひたくない氣分で歸ろうと思つた。

すると玄關の方へあはてゝバタ／＼廻つて、娘は下駄を突つ掛けて出て來たので、僕は門の所で願り返つた。

『先生は今散歩に行つて被居しやいますが、もう直ぐお歸りになります、少しお待ちなさいませ、海岸の松原へ毎日お出でになるんです』

僕は娘を抱きかゝえるようにして強い凝視を與へた。

しかし半間ばかりは、娘と僕との間に距離があつた。

空間は感情を支配する事が出来る。

娘は反撥した。僕の感情が彼女の髪に降りかゝつたから、

『何かおことづけがありますれば言つて置きますが』

『イ、エ、僕は何にも用事がないのです、さよなら』

満ち足りた心で、僕は再び汽車に乗つて小田原に降りた。